

「死の谷」を戒名につけた父

東京都 鈴木 恵子

八年前に九十五歳で他界した夫の父は用意周到な人だった。元気なうちに墓を建て、自分と母の戒名まで考えていた。

母の戒名には、生まれ育った村を流れる川の名「最上」が、父のそれには、旧ビルマ北部の土地の名「フーコン」が入っていた。

父は趣味の釣りやお囃子太鼓を楽しみ、家族を大切にする優しい人だった。いつも穏やかで、声を荒げたり、人を悪しざまに言ったりすることなど決してなかった。毎年秋に静岡県三島市で行われる戦友会に参加するのを楽しみにしていた。

私は一度だけ靖国神社で戦友に会う父に付き添っていったことがある。大鳥居の横の桜の木の下がいつもの待ち合わせ場所だそうで、そこに向かうとすでに戦友さんはいた。背の高いおじいさんだった。二人は並んで本殿に向かって最敬礼をし深々と礼をした。その長いこと、姿勢のよいこと。八十代の二人はまさに日本兵だった。

父は時々戦地での話をしてくれた。

「フーコンはたいへんな所だった。こんな大きなヒルがいて、吸いつくんだよ」  
親指を立てながら眉をひそめていた。私は父を通して初めてフーコンを知った。

「死んだ人のほとんどは、マラリアや赤痢や栄養失調、つまり餓死だ」

「一番仲がよかった戦友もマラリアで死んじゃったよ」

「おれもいつ死んでもおかしくなかったな」  
もつと真剣に聞いてあげればよかった。

その後、九十三歳からの二年間、父は本当に苦しんだ。歩けなくなる、立てなくなる、座れなくなる、自分の唾液にもむせる、声が出せなくなる。だんだん衰えていき、生きる全てに人の手を要する自分。

「こんなになって情けない」

と、涙していた。でも投げやりになることはなかった。亡くなる前年までインフルエンザの予防接種を受け、栄養ドリンクをむせながら飲んでいた。冬の寒い日、リハビリの先生と公園へ行き、冷たい鉄棒につかまって足踏みをしていた。最期まで生きぬいた。

父が亡くなり、菩提寺のご住職に正式に戒名をお願いした。父が希望した「フーコン」の入った戒名はどうなるのだろう。どんな漢字になるのだろう。まさかカタカナのままということはあるまい。

ご住職が選んでくれた「フーコン」は「富懇」だった。周囲の人に懇ろな優しい心をたくさん与えてくれたという生前の父の姿をその字に託してくれたという。いい漢字を選んでくださった。父は自分で考えた通りの戒名を得た。

「おじいちゃんの願いがなくなってよかったね」  
私たちは安心した。

しかし、私はずっと疑問に思っていた。なぜ「フーコン」「富懇」なのだろう。つらい二度と思いたしたくない土地ではなかったのだろうか。

私は父の思いに迫るべく、父や戦友の残した手記をひもといてみることにした。

父の手記にはフーコン作戦の初期にマリアで亡くなった親友への思いが切々と綴られていた。五歳の娘に一度も会わずに死んで、どんなに無念だったろう、と。他の人の手記には、河を渡る時に筏を作り歩けない人を乗せたとか、衛生兵から貴重な薬をもらい命をつないだなど厳しい状況下でもお互いを助け支え合ったことが記されていた。苦楽を共にした仲間の存在が大きかったことが伝わってきた。

部隊の約七割が死んだフーコン作戦とその後を父は奇跡的に生き延び、終戦を迎えた。二十歳から二十七歳までの青春時代を戦地に捧げたのだった。

現地の言葉で「死の谷」を意味する「フーコン」は父にとって、青春を捧げ、苦しみを乗り越えた自分への誇り、戦友との友情、亡くなった戦友と敵兵への哀惜と鎮魂、それらを象徴するものであり、その後の人生の指針となるものだったのだ。愛し、懐かしむというより忘れてはならないものだったのだ。生きている間も死んでもそれと共にあるとうと決めていたのだろう。別の戦友の文にある「人間が人間を殺す戦争は、いかなる理由があるにせよ、すべきではないと、声を大にして全世界に訴えたい」という思いもあったのかもしれない。そうだ、「フーコン」は平和への決意の言葉でもあったのだ。

今、父は母と共に「富懇」「最上」の名で静かに眠っている。

墓前に手を合わせながら、私は思う。父の人生を決して否定するわけではない。素晴らしかった。でも、戦地の名が深く刻み込まれた人生は哀しい。もう二度と誰の上にもありませんように、と。

「富懇」は私にとっても平和への決意の言葉となった。

一般の部 優秀賞 げんでんふれあい福井財団賞

父からの贈りもの

金川 久代

小学校一年生の音楽の時間に先生が「好きな楽器に触れて音を出してみよう。」と言った。皆、我先にと興味ある楽器の前に集まった。私は友達と木琴を選んだ。木琴に触れるのは初めてだった。片手でバチを持ち、ドレミの音階を叩いた。軽く叩いただけなのに明るく弾んだ音が出た。感動した。私と交代した友達は両手にバチを持ち、「みかんの花咲く丘」を上手に演奏した。当時、ラジオからよく流れていて、誰もが一度は耳にしたことのある曲だった。他の楽器に触れていた皆も、その演奏に聴き入った。終ると先生も一緒に拍手した。学校から一緒に帰りながら「すごかね。何ですぐにできると。」とたずねると「家のピアノで弾いた事があるけん。ピアノより木琴の方が易かとよ。」と答えた。友達がいつもより眩しく、大人に見えた。

家に木琴があったら楽しいだろうな。いつでも好きな時に叩けてと、木琴が欲しくなった。でも、生活が苦しく、私達の為に家の狭い仕事場で夜遅くまで働いている父に、欲しいとは言えなかった。

次の日学校から帰ると、いつものように、仕事場の父に声をかけに行った。その時、隅の方に置いてあったベニヤ板の切れ端を見つけた。「父さんこれ貰ってよかね。」と聞くと、「角だけがせんように」と言いながら手渡してくれた。

その日は、いつもより早く宿題を済ませた。そして、ベニヤ板にクレヨンで木琴の絵を描いた。バチの代りに竹の定規で叩いてみた。壁を叩いたような音だったが、木琴を演奏している気分になった。楽しかった。夢中で叩いていると、いつの間にか私の後ろに立っていた父が、のぞき込みながら「楽しそうな音がすると思ったら、木琴やね。」と言った。私が「木琴じゃなか。ただのベニヤ板と。」と言うと「ちゃんとリズムがとれていて上手か。」とほめてくれた。

学校から帰って宿題を済ませると、毎日のように、ベニヤ板の木琴を叩いた。両手にバチを持ち、叩ける曲も次第に増えた。

ある日父が「今から川原に竹をとりに行く。一緒に行こう。」と誘った。家の近くには、大きな川があり、川岸には大人の背丈より高い竹が生えていた。

七夕には、若い竹の枝を切ってきて七夕飾りを皆で作った。子供の日には、大きな笹の葉を取ってきてチマキを作っていた。

「今日は何でとりに行くと。何をすると。」とたずねると「内緒」と答えなかった。兄とすぐ下の妹も一緒に、父の後をついて行った。父は、いつもより大きい竹を選び、小枝や葉を鎌でおとした。それを皆で担いで帰った。

何をするのかずっと気になっていた。

十日程過ぎた頃、学校から帰ると父が、大きな風呂敷で覆った物をテーブルの上に置いて待っていた。開けると、同じ長さの二本の垂木の上に、厚さ一センチメートル、巾二センチメートル程の、長さの異なる竹が、長い順に左から右へ並んでいた。垂木と竹の間には、見えるのある父のフェルトの帽子を丸く切り抜いて作ったクッションが敷いてあった。

「わあ木琴だ。」と歓声をあげた。羽子板の羽の黒い実がついた二本の細い竹の棒を渡しながら「叩いてみて。」と言った。覚えた曲を叩いた。ベニヤ板の木琴とちがいに曲になった。

「すぐ演奏できてすごい。いつも練習していたからね。」と父が嬉しそうに言った。「この木琴は私のと。」とたずねると、「皆にも作った。いつでも好きな時に叩いて。竹で作ったので竹琴だけ。」と笑いながら言った。「そうか竹琴か。」と私もつられて笑った。

夕方、兄が学校から帰ってくると、真つすぐな竹にいくつもの穴を開けて作った笛を渡した。「この間の竹はこれを作る為だった。」と兄が言い、すぐに吹いた。二人の妹には、木を丸く切り抜いて作ったカスターネットを、使って見せながら渡した。家が急に、賑やかになった。

夕食が済むと「これも作っていた。」と父が竹の古い根っ子で作った尺八を持ってきた。そして、口笛を吹くように口をすぼめ「荒城の月」を吹いた。一瞬、シーンと静かになった。

自分達の楽器で、時々家族皆で演奏会のまねごとをした。

七十年前の、物や娯楽の少ない時代に、手作りの楽器は、貴重な遊び道具だった。父のおもいのこもった楽器は、月日がたつと、竹の色があせ、音も変化した。でも、私達の宝物にはかわりなかった。ずっと大切にした。

父が逝って三十年あまり。残してくれたものは、それぞれの子供に合わせて作られた楽器など、形あるものだけではなかった。工夫して生活することの大切さや楽しさも教わった。

これらは、父からの最高の贈りものだったと思っている。

高校生の部 最優秀賞

忘れられない旅

仁愛女子高等学校 二年 佐々木 萌

私には数々の思い出がある。コンサート会場での思い出、友達との思い出……。私がこれから生きていく上で、私の核になっている思い出がある。それまでの私を変えた、「一生の宝物」と言えるものだ。六年も前のことだが、忘れたことは一度もない。

「遍路」私と姉は小学四年生の時に、父との自転車野宿旅を経験している。1/2成人式のイベントだ。私は目的地を広島県の宮島としたが、台風襲来により姫路で断念。小学五年生の時に、行き先を四国に変えて再度出かけることにした。四国にある八十八カ所のお寺を参拝し、納経所で御朱印帳に朱印を頂き、御朱印代として三百円を納める。

四国までは車で行き、駐車場に車を止め自転車を組み立てる。荷物を移し替えていざ出発。自転車での野宿旅行が始まった。

真夏の旅である。道路の上はまるでフライパン。しかもお寺の多くは山の上にある。何日もしないうちに、私は「疲れた」「休みたい」とこぼすようになった。しかし、前を走る父の自転車には二人分の荷物が載っている。テント、寝袋、二日分の水分、食材、着替えなど。そのことに気付いた後も「私の荷物は自分で持つよ。」とは言えなかったが、「疲れた」を口にしなくなった。

連日三十五度を超える日々。体温はきつと四十度を超えていると思うくらい、熱くなっていった。そんな中、私が初めて「お接待」を受けたのは、五番札所、地藏寺だった。朝から太陽に照らされ、三百六十度全方向からスポットライトを浴びているような日だった。汗が出て、肌の日焼けが目立つ。保冷用のホルダーに入れたペットボトルのお茶が、すぐに生ぬるい飲み物に変わっていた。

ヘルメットに汗拭きタオルを着けたまま参拝をすませ、納経所に向かう。クーラーの効いた納経所は、そこそ極楽だった。

「涼しい！」思わず言葉が漏れた。御朱印を頂き、御朱印代三百円を出す。ところが受付の女性は、「はい。おつり」と言っただけで私の手にお金を握らせてくれた。訳が分からずにいると、

「これで冷たいジュースでも買いね。」

「でも……」と言いかけたとき、父が「ありがとうございます。」と言っただけで納経所を出た。私も小さく「ありがとうございます。」と言っただけで続いた。納経所の横の休憩スペースにある自販機で買った物は、今でも覚えている。ナタデココ入りの炭酸グレープ。

このとき、父が教えてくれた。遍路を続ける人の思いを支えるために、物やお金を渡してくれる「お接待」というものがあること。お接待してくれる人の「今はお寺にお参り行けないから、私の分もお参りしてきてね。」という思いを受け取っていること、を。

他にもたくさんのお接待を受けた。ある時私達を追い越していった車がスーパーに入っていた。数分後、その車が再び追い越していった後に止まり、運転手が降りてきて私に飲料水を四本もくれた。自分の買い物とは別に、私達に渡すために買い物をしてくれたのだ。その人は、「頑張つてや」と言つて笑つてくれた。すごく嬉しかった。

人と話すことが苦手だった私を、人と話すことが好きな人に変えたのは、四国でたくさんの人から声をかけられ、「ありがとう」を返し、納経所などで四国の人と会話を重ねた経験があったからだと思う。

父の仕事上、五・六年生の二年かけて四国を回った。二年間で一番驚いたお接待。

結願の寺、大窪寺から山を下りてしばらく走ると小さな温泉がある。五年生の時、家に戻る前に立ち寄った。そこで一緒にお風呂につかった地元のおば様としばらく話し合った。何をしているのか、何が好きかなど。一日だけの風呂友。そう思っていた。六年生の夏、全ての寺を回り終え、旅の汚れを落としに、と再び立ち寄った。「もしかして萌ちゃん？」突然声を掛けられた。あのおば様だった。一年前のわずかな時間、打合せ無しで訪れた温泉。一年前の思い出と、新しい思い出を一気に頂いたお接待。

四国はとても不思議な場所、私の第二の故郷である。人々は優しく、張り詰めていた緊張がなくなり、ふわっとした感じになる。まるで、雨上がりの虹を見た時のような。

四国から帰つてしばらく後、兄や姉に言われた。「優しくなったね。」そう言えば、人と話すのが苦手だったのに、話せるようになっていく。感謝の言葉や謝罪の言葉も言えるようになった。

四国遍路は私の「一生の宝物」であり、思い出すだけで、自分が変わったことを思い返し笑ってしまう。結願後毎年四国を訪れていたが、ここ二年間は行けていない。だからこそ、行きたいという思いが強くある。遍路も、もう一度回りたい。その時は、当時の私のような思いで回っている人に、「そんなに気負わなくて良いよ。」と声を掛ける立場として。

高校生の部 優秀賞 げんでんふれあい福井財団賞

### 幸福の時間

京都教育大学附属高等学校 一年 白石 奈々

「もう、目え開けてええで。」

父に言われて固く閉じていたまぶたをそっと開けると、そこは、遙か彼方に地平線をのぞむ、一面の青い海を見下ろす崖のてっぺんだった。崖に打ち寄せる白波、木々の深い緑。突き出た半島に見える、常神岬灯台。

常神へと向かう福井県道二一六号は曲者だった。ぐにゃぐにゃと何度も曲がり、アップダウンも大きい。小さな頃から車酔いのひどい私が編み出した必殺技は、「目を閉じる」ということ。母も隣で洗面器をかかえて青い顔をしている。京都から一人で車を運転してくれていた父は、そんな私たちを気遣って、いつも目を開けて良いタイミングを教えてください。公営駐車場に車を停めてからも、具合の悪い私たちの代わりに荷物をかかえて狭い集落を何度も往復してくれた。

常神は、澄んだ美しい海にたくさん魚が泳ぐ、「常に神がおわす島」。点在する無人島。寄せ合うように崖に沿って立ち並ぶ家々。たった一軒しかない雑貨屋でアイスを買って食べると、ようやくひと心地ついた。天然記念物の、巨大なソテツを囲むように建てられた宿の部屋は清潔で、窓を開けると潮の香りがする。やさしい笑顔の宿の主に迎えられて、父が挨拶を交わしている。私はとたんにソワソワし始めた。早く海に行きたくて仕方ないのだ。船で無人島まで送ってもらい、釣竿を出したら、生き餌をつけて海に垂らす。波の音を聞きながら、深く息をすると、目と耳だけでなく、身体の中まで海色に染まった。幸せな時間。父がシュノーケルをつけて海へ潜り、釣りのポイントを教えてください。家族三人が食べる分の魚だけを釣ると、私もシュノーケルをつけて沖へと泳いでいく。ブイのさらに向こうで、父が手を振っている。

夕食は豪華絢爛だった。海の幸がこれでもかと並び、そのどれもがびっくりするくらい美味しい。これ以上、食べられないと思っても食べられる不思議さ。父も母も私も、この幸せな時がずっと続くと信じていた。

「今年は台風で無理そうです。」私が中学一年生の時、定宿の主から電話があった。この常神は県道二一六号線が通行止めになると、陸の孤島になってしまう。宿の主を心配しつつ、「来年を楽しみにしています。」と、母が答えていた。

これ以後、私たちが常神を訪れる機会は来なかった。本当は、その頃から少しずつ変わっていたのだと思う。父が所属していた開発課から管理課に異動になり、「なんで……。」と家で愚痴るようになった。ちょっとしたことイライラして、母や私に当たるようになった。母も私も、父が家で安らげるように気を配ったが、父の心を癒やすことはできなかったよう

に思う。

そんな時、塾に行き始めた私を心配して、父がスマホを買ってくれた。友人たちはスマホをコミュニケーションの道具として使いこなしていたが、私は緊急時の連絡手段としてしか使わなかった。父に、「スマホに夢中になって、勉強がおろそかにならないように。」と言われていたせいもあった。しかし、同時にスマホを買った父は、初めてのスマホにのめり込むようになった。平日は帰宅後、深夜二時頃までスマホでゲームをするようになった。仕事のない日は、ほぼ一日中。スマホを手を持ったまま食事をし、布団に入る。外出を厭い、食事も入浴も短時間。会話は減り、最低限のことしかしなくなった。ゲームに集中できないのか、私が夜勉強をしていると文句を言うようになった。私の閉めた洗面所の扉が、ほんの少し開いているのが気に入らなくて、激しく注意されたこともある。――自分は、電気をつけっぱなし、戸を開けっ放しでいるのに。

果たして、スマホやゲームが父の癒しになっているのか、私にはわからない。しかし、眉間に皺を寄せてスマホで夜遅くまでゲームをする父を、幸せそうだとは思えなかった。そう、幸せな時間とは、常神にいた時のような時間を言うのではないだろうか。

あれから三年。父が十年前に特許申請したものが、発明協会で表彰された。表彰状を手にした父は、笑顔で誇らしそうだった。「たいしたことないけどな。」と、言う父を、母と私が褒めると、照れくさそうにしていた。そして、ほんの数分だが、父が少しずつ食事の時に会話をするようになった。

常神は、幸せな子供時代を過ごした父の思い出の土地だった。裕福だった父とその家族は、毎年この常神で夏を過ごしていたらしい。三十年以上経っても、変わらず美しい姿をとどめる常神。神がおわす神秘の島。父が歩む道のりは、今は曲がりくねっているのかもしれない。常神へと至る、あの長い道のりを思い、私は目を閉じた。